



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



## BlakeのThe Gates of Paradiseについて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-06-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 狐野, 利久 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/3388">http://hdl.handle.net/10258/3388</a>

# Blake の *The Gates of Paradise* について

狐野利久

## A Study of Blake's *The Gates of Paradise*

By Rikyu Kono

### Abstract

When *The Gates of Paradise* was engraved in 1793, the title was *For Children/The Gate of Paradise*. But in 1818 the title of this emblem-book was changed into *For the Sexes/The Gates of Paradise*. Why did Blake change the title?

In 1789 Blake issued *Songs of Innocence*, whose publication, I think, was due to the issue of the *Divine Songs for Children* by Issac Watts in 1788, because his *Divine Songs* was written for great purpose of the education for children in his age. Blake was, I suppose, so much repulsive against this *Divine Songs* that he was driven to publish *Songs of Innocence* in next year. By 1794 another type of songs, which was later called *Songs of Experience*, had been engraved. Blake had been caught by a new idea that this *Songs of Experience* should be bound in one volume with the *Songs of Innocence* under "Shewing the Two Contrary States of the Human Soul". Then necessarily he was, I believe, compelled to publish a certain book for children in succession to the *Songs of Innocence*, which was an emblem-book named *For Children/The Gates of Paradise*.

The *Songs of Innocence and of Experience* in one volume was not so much ignored that he might abruptly think that it would be better to make another emblem-book opposed to *The Gates of Paradise* and to get them bound in one volume. Geoffrey Keynes shows us a sheet of picture in the Introductory volume of the facsimile edition of Blake's *The Gates of Paradise*, which tells us that Blake tried to engrave *The Gates of Hell*. But this idea was, of course, not fulfilled, because, I think he might notice that Paradise and Hell are not contrary each other just like the Innocence and the Experience of the Human Soul, and that they are in the interpenetration each other: Paradise is in Hell and Hell in Paradise.

These two editions, in spite of the same emblem-book, make it possible to give the different interpretation: whereas *For Children/The Gates of Paradise* in 1793

teaches us the awakening our mind-eye to the Eternal World (Paradise), *For the Sexes/The Gates of Paradise* in 1818 expresses, I think, the interpenetration between Paradise and Hell, by adding *The Keys, Prologue*, and *Epilogue* to the emblem-book.

Therefore, when *The Gates of Paradise* was reissued in 1818 it was necessary for him to change the title.

## 序

*The Gates of Paradise* は Emblem book で、1793年初めて彫版された時は題が *For Children/The Gates of Paradise* となっていた。ところが1818年に出されたものでは *For the Sexes/The Gates of Paradise* となっているのである。*For Children* をどうして *Por the Sexes* に変えたのかということについては、Blake のみぞ知ることであって、とうてい吾々にはその理由を解くことは至難なのであるが、以下私見をのべてみたいと思う。

Blake は1789年に *Songs of Innocence* を世に出したが、この本が出るについては Isaac Watts の *Divine Songs for Children* が1788年に出版されたということと大いなる関係があるように思う。なぜなら学校教育というものをきらった Blake が、子供の適切な教育を願って出した Watts の *Divine Songs* に強い反感を持ったことであろうし、それ故に Swedenborg の影響をうけて書いた子供の *Innocence* に関する詩を発表してみようという気になって、*Songs of Innocence* を世に出したということが、当然のこととして考えられるからである。ところが1789年のフランス革命が Blake の予期せざる方向にむけて進んで行ったということとも関連して、*Songs of Innocence* を書いた時とは異なった心境の詩、*Songs of Experience* が書かれて行ったが、やがて1794年に *Songs of Experience* の title-page が出来上る頃までには、*Songs of Experience* を *Songs of Innocence* と合本することによって、‘the two Contrary States of the Human Soul’をうたった詩として、世に問う構想が Blake の胸の中に、すでに出来上っていたものと考えられる。そうすると Isaac Watts の *Divine Songs of Children*

に反対する意図のもとで出版された *Songs of Innocence* が *Songs of Experience* と合本してしまうと、当然のことながら、*Songs of Innocence* を発表した当初の目的がなくなってしまうので、いわば、*Songs of Innocence* に代るべきものとして、*The Gates of Paradise* が彫版され、*For Children* という題がつけられて、一足早く1793年に発表されたのではなかろうかと考えるのである。

一方 Blake は *Songs of Innocence* を *Songs of Experience* と合本して *Songs of Innocence and of Experience* と題して1794年に出してみると、まんざらでもなかったもので、今度はすでに出版した *The Gates of Paradise* に相対する形の、*The Gates of Hell* を彫版してみようと Blake は考えたらしい。*The Gates of Hell* は結局のところ、製作されず、Blake の頭の中だけで終わってしまったのであるが、Geoffrey Keynes は1968年複製出版した Blake の *The Gates of Paradise* の Introductory volume で、*The Gates of Hell* と書いた Blake の、いわば、筆蹟を写真で紹介し、証拠としているので、考えたことは確かである。

ではなぜ *The Gates of Hell* は製作されず、Blake の頭の中だけで終わったのであろうか。この理由は推察しか出来ないものであるが、おそらく次のような理由からであろう。すなわち、*Songs of Innocence* と *Songs of Experience* の場合のように、Paradise と Hell とは相対立し、対応関係にあるというものではなく、むしろ、相即相入 (interpenetration) の関係にあるということに、Blake は気がついたからでなかろうか。つまり Paradise の中に Hell があり、Hell の中に Paradise があるのであって、両者は別々に、対立してあるものではないということである。そういうことで、*The Gates of Hell* の製作はしなかったのであろう。それから又 Paradise と Hell とは相即相入の関係にあるということによって、1818年に *For the Sexes/The Gates of Paradise* と題を変えて出すことによって、表現しようとしたのだと私は考える。そのために、1793年と同じ Emblem book でありながら、*The Keys* や *Prologue* それに *Epilogue* をつけ加えたのではなかったらうか。兎に角、*For Children/The Gates of Paradise* よりも *For the Sexes/The Gates of Paradise* の方が、思想的面においても深みがあるように思えるのである。

何はともあれ、*For the Sexes/The Gates of Paradise* の *The Keys* を手がかりに各 Plate を見、又 *Prologue* や *Epilogue* を考えて行くこととする。

### (1) Frontispiece



Blake は木の葉の上で眠っているサナギの姿の人間と、木の葉をたべている毛虫とを描き、人間とは何かと問うている。S. Foster Damon によると、

Here Blake uses the old Greek symbol of the body as a cocoon from which the soul (psyche) will be reborn as the butterfly.<sup>(1)</sup>

といているので、サナギの姿の人間は、古代ギリシャ人の考え方をそのまま借用したのであろう。そばで木の葉をたべている毛虫は、人間の顔をしているサナギの、やがて蝶になる前の段階の姿であるが、Geoffrey Keynes は、

The 'Catterpillar on the Leaf' in the illustration symbolizes man as a worm feeding on the vegetable life of the material world, that is, on error.<sup>(2)</sup>

といっている。サナギや毛虫というような、worm の姿で象徴される人間は、vegetater とか Human Vegetated Form 等と Blake によって言われているのであるが、要するに、物質的なものに幻惑されて真実を見る器官を眠らせてしまい、一切のことを二元的に分別して考え、そして毎日毎日を無為にすごしている人のことで、具体的に言えば、当時の聖職者である priests のことであつた。*The Marriage of Heaven and Hell* (circa 1790—93) の *Proverb of Hell* で Blake は、

As the caterpillar chooses the fairest leaves to lay her egg on, so the priest lays his curse on the fairest joys.<sup>(3)</sup>

といっている。つまり聖職者は宗教を信ずる喜びというものを人々の心から啄んでたべてしまい、ただ一切のものを善悪とか、白黒というように、二元的に分別していく「まなこ」だけを、人々の心に植えつけているということであろう。Blake は又 *Auguries of Innocence* の終りの方で次のように言っている。

We are led to Believe a Lie  
When we see not through the Eye  
Which was Born in a night to perish in a Night  
When the Soul Slept in Beams of Light.<sup>(4)</sup>

一切のものを「眼でもって (with the Eye)」見る限り、うわべだけの判断しか出来ない。うわべだけの判断はたいてい二元的であつて、吾々の魂 (Soul) をゆさぶるような結果は生じない。ところが「眼を通して (through the Eye)」一切を見る時、一切のものすべてが吾々の魂と共鳴するのを感じ取る事が出来るのである。そういうことを Blake は次のように説明している。

When the Sun rises, do you not see a round disk of fire somewhat like a Guinea?  
O no, no. I see an Innumerable company of the Heavenly host crying 'Holy, Holy is the Lord God Almighty'.<sup>(5)</sup>

彼は日の出の時を単に写實的に客觀的に「眼でもって」とらえるのではなくして、彼の「眼を通して」見るから、彼の魂と直接共鳴する何ものかを感じ取る

ことが出来るのである。その彼の魂と共鳴する何ものかを、Blakeは、「神をたたえてうたう天子の群」と表現したのである。今日一日がこれから始まろうとする早朝の、すがすがしい一瞬が、彼の「眼を通して」適格に表現されているというべきであろう。仏教で言うところの「一切のものに仏性あり」ということも、眼でもって見る習性のある人には理解出来ないのである。Blakeは「眼でもって」見ることしか出来ない人のことを、「眠れる子供の顔をしたサナギ」だとか、青虫にたとえているのであるが仕方がないであろう。Blakeは又 *The Marriage of Heaven and Hell* の中で次のように言っている。

If the door of perception were cleansed everything would appear to man as it is, infinite. For man has closed himself up, till he sees all things thro' narrow chinks of his cavern.<sup>(1)</sup>

「知覚の扉を清める」ということは「眼を通して見る」ということであろう。その時すべてのものが、あるがままに見えるし、あるがままに見えれば魂にふれあうものを感じとることが出来るのである。従って Blakeはこの Frontispiece の下に、「人間とは何か (What is Man?)」と書いているが、その答は人間というものは「眼でもって」しか物ごとを見る事が出来ない worm の如きものであるというのであろう。しかし、それに次いで

The Sun's Light when he unfolds it  
Depends on the Organ that beholds it.

とも言っているので、今までのべてきたように、太陽がギニー硬貨に見えるか、それとも神をたたえる天子の群に見えるかということは、各人の知覚の扉である器官(Organ)によるのであって、その器官が開かれない場合は「眼でもって」見ることになるから、ギニー硬貨にしか見えないであろうが、開かれる(unfold)と神をたたえる天子の群とか、或は神は光なり (God is Light) で、神そのものに見えるのであると、Blakeは教えているのである。

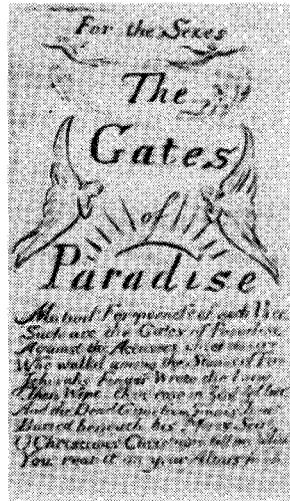
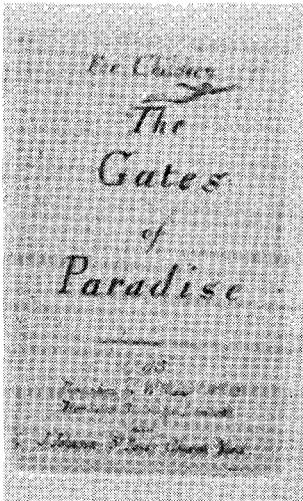
ところで、1818年版においては、Frontispieceの意味を解く Key がついていて、次のようになっている。

The Catterpillar on the Leaf  
Reminds thee of thy Mother's Grief.

この lines はそのまま *Auguries of Innocence* の中に出ているのであるが、Geoffrey Keynes によると、Mother's Grief というのは Creation and birth の時の苦痛ということであるという。Creation も birth も共に物をつくり出すということで同じことなのだが、一切はもともと永遠なものであるのに、分析し、分別して行こうとする働きがおこる時に、人間の過失 (Error) が始まったのであった。過失 (Error) は Blake にあっては Creation と同意語である。従って一切を分析し、分別することをやめない限り、人間は Creation を続け、永遠を見失なって Vegetable world をさまよいつづけなければならない。そういう意味で、木の葉の上にいる worm の姿は、知覚の扉を清めずに、自己中心的立場で、一切を二元的に分別し、分析して、可としている批判的理性にめざめた、吾等現代人の姿そのものであるということを知らされるのである。ただ Catterpillar を木の葉の上に見ると母親の悲哀を思い出させるというこの Key が 1818 年のにつけられたために、1793 年の時のよりも、この絵に対する解釈がいちぢるしく変わってしまったことを感ずるのである。即ち、この Key がつかない 1793 年の場合は、*For Children* という題がこの emblem book についてただけに、*Paradise Lost* の可能性をもって人間界に生れてきていることを Blake は子供達にさとしながらも、それとなく神を見失なわないで生きて行くようにという Blake の思いやりというものを感じさせるものであった。ところがこの Key がつけられることによって、この絵からうける感じは一変し、いかにも *For the Sexes* という題にふさわしくなるのである。即ち Vegetable world をさまよいつづけている人間の、Creation という過失を限りなく続けて行かなければならない悲しみというものを強調しているように思えるのである。そうして又、この Key をつけることによって Plate 16 と関係し、人間の輪廻転生ということが言われているようにも思えるので、後程又 Plate 16 のところでのべることにするが、私は、1818 年のにつけられたこの Key の言葉が、おそらく *The Gates of Hell* が彫版されたら、その絵につけられた言葉であり、又、この言葉の意味するような絵

が彫版されたのではなかったらと思うのである。しかし、この *Key* の言葉が意味するような絵は、*The Gates of Paradise* の、この Frontispiece の絵以外には、Blake の *Imagination* には浮かんで来なかったので、*The Gates of Hell* は遂に製作されずじまいに終わったということも出来るであろう。

## (2) Prologue



Frontispiece に続いて Blake は Prologue を書いている。この Prologue は1818年版の方にだけ Epilogue と一しょにつけられていて、内容的にも Epilogue に続くものだと考える。

Mutual Forgiveness of each Vice,  
Such are the Gates of Paradise  
Against the Accuser's chief desire,  
Who walk'd among the Stones of Fire

「互いの欠点を赦しあう」ということが「楽園の門」に通ずる道なのであるが、「互いの欠点を赦しあう」ということは worm のように「自らを閉ざす人」と

か「眼でもって」見る人には出来ないことである。一切を分別し、分析する働きが心にある限り、いつも自己中心的で、自分だけが正しいとする思いがあるから、吾々は *Accuser* となるばかりであって、他人を「赦す」ということは、とうてい出来得ないことである。「火の岩の間を歩く *Accuser*」とはだれのことかと言うと、それは *Covering Cherub* (守護のケルビム・智天使) のことであって、エゼキエル28：16に

I will destroy thee, O covering Cherub, from the midst of the stones of fire.

とあることから明らかである。ケルビムは人間の顔をしながら獣のような体をし、かつ翼を持っているものとされ、楽園の番人(創世記3：24)、神の玉座のにない手(エゼキエル1)、聖櫃の守護者(列王記1：6)とされている。いづれも、罪を背負った、汚れた人間が聖なる神のおわしますところに近づけないことを示しているのであろう。従って「お互の罪を赦しあうこれぞ楽園の門(*Mutual Forgiveness of each Vice, / Such are the Gates of Paradise*)」という Blake の考えと、罪人を近づけないようにケルビムを番させている楽園の門とは、真正面から対立することとなる。しかもケルビムは、又、十誠を刻んだ2枚の石板が収められているといわれている箱(民10：33)の守護者でもある。そもそも Blake にとって十誠は、

No individual can keep these Laws, for they are death to every energy of man and forbid the springs of life.<sup>(7)</sup>

であって、そういう十誠を守護するケルビムは、Blake にとっては、究極的には *Selfhood* そのものなのである。

Thus was the Covering Cherub reveal'd, majestic image  
Of *Selfhood*, Body put off, the Antichrist accursed,  
Cover'd with precious stones: ...<sup>(8)</sup>

*Prologue* は更に続いている。

Jehovah's fingers Wrote the Law :

Then Wept! then rose in Zeal & Awe,  
 And in the midst of Sinai's heat  
 Hid it beneath his Mercy Seat.  
 O Christians, Christinas! tell me Why  
 You rear it on your Altars high.

なぜキリスト教徒は十誡を聖壇の上高く掲げるのであるか。十誡の掟は人の行為を善悪に分別し、人に処罪と悔蔑を加えるものでしかないから、イエス・キリストはそういう十誡を認めなかったではなかったか。

I tell you, no virtue can exist without breaking these ten commandments. Jesus was all virtue, and acted from impulse, not from rules.<sup>(9)</sup>

それなのに、世のキリスト教徒はやたらと「～すべからず」と、十誡の掟にも等しい rule や law を作って、人々を規制し、人々の慈悲心や愛の心をつみとつてしまっている。そういうことこそ、The Gates of Hell ではないのか。Blake は以上のように、この Prologue で当時の宗教界を批判するのであった。

### (3) Plate 1



この絵には

I found him beneath a tree in the Garden.

という言葉がついている。a tree in the Garden といえば、もちろん聖書に記されてある楽園の智慧の木のことなのだが、この絵を見ると善悪を知る智慧の木ではなくて長い葉の繁っている mandrake の木のことであるようである。

mandrake (マンダラゲ) はヨーロッパの暖かい地方に野生する植物で、根はふたまたにわかれていて、地面から引き抜く時には、変な scream を発する。それから aphrodisiac があると想像されている、等々のことから、magical speculation を持ったものとされている。聖書の創世記30:14~16によると、Reuben が野で mandrake を見つけ、それを母親の Lea にわたしたところ、Lea の妹の Rachel が子供がなかったためにとでもそれを慾しがったということであるから、Fertility をうながすものとも考えられる。その Fertility をもってくる mandrake の赤子を、一人の女性が地面から引き抜きながら歩いているというのがこの絵なのである。一体この女性は何者なのであろうか。

Key には

My Eternal Man set in Repose,  
The Female from his darkness rose.

とある。Eternal Man とは Blake の神話では Albion のことである。Albion が「座して休む」とは深い眠りにつくことである。そうして Albion が眠る時、Creation がはじまり、一切が分別の眼でもって見られるようになる。又二行目の The Female とは Jerusalem のことで、Blake の神話によると、Liberty をあらわす女性で、Albion の emanation なのである。A *Vision of the Last Judgment* で Blake は

In Eternity Woman is the Emanation of Man: she has No Will of her own.  
There is no such thing in Eternity as a Female Will.<sup>(10)</sup>

といている。ところが、この Jerusalem は、Albion が眠りについて Creation

がはじまると、自分の意志をもって行動すべく、「彼の暗黒から立ち上る」のである。Plate 1 に描かれている女性は、正しく、自分の意志をもって立ち上った女性なのである。そうしてこの女性は、mandrake の赤子を次ぎ次ぎに引き抜いているので、おそらく不妊の女性であろう。Key では更に

And She found me beneath a Tree,  
A Mandrake, & in her Veil bid me.

と説明している。S. F. Damon によるとヴェールは the film of matter which covers all reality<sup>(11)</sup> のこととっている。つまり、女性としては己れの不妊という悲しい事実をおおいかくして、何とか子供を生める体になりたいという意志のものに mandrake を採集しているわけである。この不妊の女性にとっては mandrake の赤子は fertile の力があると思われているのである。

かくして、この女性によって地面から引き抜かれて、彼女のヴェールに包み込まれた mandrake の赤子たちは、Albion の深いねむりの中に成長し、物質的なものに幻惑された人間になってゆくのである。

#### (4) Plate 2



第2図のタイトルは「水」である。そして、

Thou Waterest him with Tears.

とある。Thou というのは第1図で見た女性のことであろう。彼女の自由意志によって mandrake の赤子は大地からむりやり引き抜かれ、物質的なものに幻惑されながら、一切を二元的に分別し、思考するような人間に育てられたのである。その結果いつも絶えざる対立抗争を作り出し、しかもその対立抗争は Satan-Urizen を人間の上に君臨する絶対者なる神としたことから生じたものであるから、彼はいつも、Los や Luvah や Tharmas の突き上げを受けて、悩み苦しみ、即ち涙 (water) が絶えないのである。それ故 Blake はこの絵の Key として、次のように記している。

Doubt Self Jealous, Wat'ry folly,

「疑は自己を嫉妬する」とは Satan の如き Urizen が神にとってかわって、一切を支配することから生ずるのである。まことに「水のような愚かさ」であるのだ。

この図のタイトルである「水」は material world をあらわす。material world に生れると、ここは Satan-Urizen の支配するところであるから、doubt が対立抗争の原因となり、吾々の自我 (self) は少しも満足されず、吾々は苦痛 (又は苦悩) の涙にぬれていなければならない。そういう在り方は全く愚かしいことであると Blake は言うのである。

## (5) Plate 3



第3図のタイトルは「地」である。そして第2図においては、河岸（又は海岸）の岩にすわって涙していた若者は、この第3図では、大地の中に閉じ込められて、生きるためにもがき苦しんでいる有様の人として描かれている。ここでは、

*He struggles into Life*

と書いている。Keyを見ると、

*Struggling thro' Earth's Melancholy.*

と説明している。BlakeではEarthはBodyであって、あらゆるenergyはBodyより生ずる<sup>(12)</sup>という。ところが一切を二元的に分別して、例えば、人間は精神と肉体から成り立ち、しかも理性は精神から生ずるが故に善であるのに対し、エナジーは肉体から生ずるが故に悪であると考えれば、だれでもSatan-Urizenの指図によって、悪とされたBodyと戦わねばならず、しかもBodyの中に精神が閉じ込められて、Melancholyにならなければならない。Blakeはそういうように一切を二元的に分別して、一方を善とし、他方を悪とするような考え方に

反対したのであった。

この絵では、material world に生れた人間の姿を示しているわけである。

### (6) Plate 4



第4図は「空気」である。これには

On Cloudy Doubts & Reasoning Cares

とある。この場合の雲という言葉の意味は clouds of reason (The Voice of Ancient Bard 4), clouds of learning (*Jerusalem* 52: 7) 等の使い方があるので、reason を表わすと考えられる。それ故若者は、今度は広大無辺なる宇宙の中であって、理性をあらわす雲にのり、深刻な表情をしているところである。なぜそのような深刻な顔をしているのかというと、己れと宇宙のすべてのものとの関係を分別し、理知的に、合理的に解こうとして苦悩しているわけである。この絵の Key を見てみると、この絵の解釈は更に深いものになる。すなわち、Key は

Naked in Air, in Shame & Fear,

とある。理性にめざめ、理性をもって行動する年齢になると、人はだれでも、蛇の誘いに負けて智慧の木の実をたべた Adam と Eve のように、裸でいることは恥かしいし、不安でもある。裸でいることが恥かしく、不安を感じずという事は、すでに *eternity* を失った姿でもある。そうして、一切のことを理性的に分別して行こうとするから、そういう人の心というものはいつも不安で暗く、顔の表情も苦悩をおびている。

### (7) Plate 5



第5図のタイトルは「火」である。この絵は、Luciferである Satan が神と戦うため槍と盾を持って火の中に立ち現われたところを描いたものである。この絵に Blake は

That end in endless Strife.

という言葉をつけている。S. F. Damon は

As a state of mind in the fallen man, Fire is flind warfare.<sup>(12)</sup>

といっている。神にむかって槍と盾をもって戦っても、それは道理をわきまえぬ振舞であり、盲目的戦という外はない。青年時代の行動というものは、恐れを知らぬ、盲目的、衝動的行為であることが多い。後で Blake が Key の中で、

Blind in Fire with shield & spear.

といっているのは、そういうことであろう。そのためかどうか知らぬが、1793年では火の中に立つ Lucifer の目は開いていたが、1818年では盲目になっている。Key は更に、

Two Horn'd Reasoning, Cloven Fiction,  
In Doubt, which is Self contradiction,  
A dark Hermaphrodite I stood,  
Rational Truth, Root of Evil & Good.

1818年の絵では又、ちぢれた髪の毛は二つの角を suggestion するようにつくられているが、この角はおそらく理性をあらわすものであろう。理性は一切のことを二元的に分析し、分別し、その結果一方を立てて他方を切り捨てるのであるが、そのように一方を立てて、他方を切り捨てることが出来ず、両方を真実と認め、両方を立てて行こうとすれば、両性動物にならざるを得ない。両性動物とは、Damon によると

a sterile state of unreconciled and warry opposites

のことであるというから、「自己の内部で相争い、相対立して何もかも生み出せない姿」、即ち自己矛盾の状態をあらわすのである。兎に角、Lucifer は批判的理性にめざめ、自己矛盾に落入りながらも、限りなき分別の戦いを続けて行かねばならないのである。Key は更に続く。

Round me flew the Flaming Sword ;  
Round her snowy Whirlwinds roar'd,  
Freezing her Veil, the Mundane Shell.  
I rent the Veil where the Dead dwell.

the Flaming Sword とは冷たい理性の働きのことであろう。理性が分別的に働くと「雪の旋風 (snowy Whirlwinds) がほえる」という。つまり理性は本来一切を割り切って見るから、理性の力 (the Flaming Sword) にかかると、生きるものも死んでしまうのである。Mundane Shell (現世の殻) とは、吾々の物質欲が作り出した世界のことであり、心のかよわぬ死の世界である。理性である Satan は物質界に吾々人間を閉じ込めておこうとする。Veil もやはり Mundane Shell と同じで、吾々を閉じ込めておこうとするものである。本来の自己とも言うべき吾々の命は、しかしながら、そういう世界に閉じ込められることをきらい、反抗し、引きさこうとするものである。

Plate 5 の絵は、吾々の批判的理性が本来の自己 (即ち、神) を死の世界に閉じ込めておこうとするのに対し、本来の自己自身は一切の殻を破り、ペールを引きさいて、一切無限の世界に出ようとするものであるから、兎角、青年時代は理性的分別と自己自身との戦いがはてしなく続くものであるということを示しているであろう。

### (8) Plate 6



翼のある天子のような子供が、今まさに卵の殻を破って出ようとしている絵が書かれてある。顔は子供というよりも (すでに性的満足を求めることが出来る程) 成熟した大人——男もしくは女——の顔である。Blake は、

At length for hatching ripe he breaks the shell.

と題をつけている。穀は、前にのべた Mundaneshell や Veil と同じく, materialism をあらわしている。日本語にも「自分の穀の中に閉じ込もっている」という言葉があるが、自分の穀に閉じ込もっている人の顔は暗く、とげとげしい表情をしているものである。そういう自分の穀を破らなければ吾々は生きて行くことが出来ないのである。吾々はどうしたら自分の穀から出て来れるのであろうか。Key をみってみると、先づ、

I rent the Veil wher the Dead dwell :  
When weary Man enters his Cave  
He meets his Saviour in the Grave

と説かれてある。洞穴というのは、Platon の哲学に似ているのであるが、人間 (Man, 若しくは True Man ; 即ち本来の自分自身のこと) を閉じ込めておく肉体そのもののことである。肉体なしには人間は存在し得ないが、それだからといって、肉体の中にのみ閉じ込もっているのでは、本来の自分自身——人間——が活動出来ないから、生ける屍同然である。そうして生ける屍同然の人、洞穴や墓或は Veil に閉じ込める人、そういう人の言葉は暗く、人生に疲れた顔をしている。どうしてそういう顔になるかという、いつも批判的理性に基づいて行動し、終りなき戦をくり返しているからである。そのたびに自我の穀 (Mundaneshell) は厚くなる。そういう Veil であり、Cave であり Grave であるとされる穀にとじこもって生ける屍になっている人を救わんとする救済者 (Saviour) に出会う時、穀は破れるのである。

次ぎに Key は続けて言う。

Some find a Female Garment there,  
And some a Male, woven with care,  
Lest the Sexual Garments sweet  
Should grow a devouring Winding sheet,

Garment は衣がかくし、おおっている性を suggestion する。吾々は肉体の中に

閉じ込める限り、男性は女性を、又女性は男性を性の対象として意識する。そうすると女性は、物質欲に目がくらみ、金銭を得るための手段として、性の交わりを行ない、男性は性の交わりによって金銭を取られ、そのたびにやつれて行く。「欲ふかい曲りくねったシャツ」とは互に相手を性的に意識し合った男女の交わりを表わすのであろうが、男女の在り方が、楽園の Adam と Eve のようであることを願うためにも、Mundaneshell を打ち破り、Grave や Cave の中に住むことのないよう、Saviour の御心にそって行くことが大切であると Blake は言うのであろう。

### (9) Plate 7



この絵のテーマは、

What are these? Alas! the Female Martyr,  
Is She also the Divine Image?

である。絵には飛び去りつつある fairy と、これを帽子でたたき落そうと追いかけている青年、それに帽子でたたき落されて、地上にのびて倒されている fairy が描かれている。S. F. Damon はこの fairy を a natural joy と解している。<sup>(13)</sup>

そうすると、この絵は男性の果てしない欲望に、愛のもつ自然の喜びが、いつも犠牲にされているということをあらわすのであろう。いつも愛の犠牲者になるのは女性なのである。Blakeは、女性がいつも愛の犠牲の側に立たされ、いわば愛の殉教者となる時、神にも等しい姿となって復活するのであると言っているのである。

Keyには

One Dies! Alas! the Living & Dead,  
One is slain & One is fled.

と説明してある。人はこの世において真の生を全うするためには、愛の殉教者となる女性のように、いつも自我を殺し、自己犠牲の心でなければならない。

生きながら死人になりてなりはてて

心のままにするわざぞよき

である。ところが多くの人は自我を主張して対立し、自我の争いの中で殺され、又、自我の主張が通らぬと逃げ出してしまうというようなことで、自分の一生を終えているのである。

## (10) Plate 8



大樹の下で老人が、建物を背に腰をおろしている。彼は大刀を右手に杖のようにつきながら、左手を顔にあてて、疲れ切った表情をしてすわっているのである。一方裸体の若者は、この老人を突きさそうと、槍を持った左手と、空を握る右手を高くあげ、開いた両足の右足の方に体重をのせて、少し体をねじって身がまえている。第8図はそういう絵である。この絵には、ただ

My Son! my Son!

とあるから、父と子のいさかいを描いたものであろう。Key には

In Vain-glory hatcht & nurst,  
By double Spectres Self Accurst,  
My Son! my Son! thou treatest me  
But as I have instructed thee.

とある。Spectre というのは、Blake の場合は、自我中心の心、即ち自我そのもののことである。

The Negation is the Spectre, the Reasoning Power in Man : this is a false Body, an incrustation over my Immortal Spirit, a Selfhood which must be put off & annihilated away.<sup>(14)</sup>

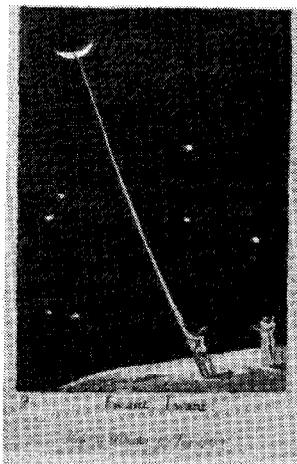
とか、又、

The spectre is the Reasoning Power in Man, & when separated from Imagination and closing itself as in steel in a Ratio of the things of Memory, It thence frames Laws & Moralities to destroy Imagination, the Divine Body, by Martyrdoms & Wars.<sup>(15)</sup>

と Blake は言っているので、Spectre は、一切を規則だとか、基準だとか、割合だとかというものをつくり出して行く理性のことなのである。学校等による教育によって、吾々の子供達は理性的に分別し、合理的・科学的に思考して行くように育てられるのであるが、やがて自我に目覚めるようになると、親や教師の教えに従わず理性的に分別し、合理的・科学的に思考するようになって、遂には教えてくれた親や教師に反抗し、暴力をふるうようになる。

この絵に描かれている老人は、Blake が好んで描く Urizen の姿であるが、Urizen が我が子を Spectre になるように育てたのであるから、むしろ親と対等になり、親と争い、はてまた親に槍をかまえて殺そうとする程までに成長した我が子を見て、親の期待通りに成長してくれたと喜ぶべきなのに、Urizen は苦悩の表情をして、深刻な顔になっている。Blake は、学校教育にはこのような矛盾があるので、強く反対し、嫌ったのであった。現代日本の、校内暴力や家庭内暴力という問題も、Blake のこの絵から、考えさせられるところである。

## (11) Plate 9



月に梯子をかけて登ろうとする若者と、それをそばで笑って見ている男女とが描かれている。月は Blake の神話では Beulah をあらわしている。Beulah とは、S. F. Damon によると、

In Blake's system, Beulah is the realm of the Subconscious. It is the source of poetic inspiration and of dreams (*FZi*: 20, 99, 246; *Mil* 2: 1; *J* 17: 27; 36: 22; 63: 37; 79: 74). In Beulah, "Contrarities are equally True" (*Mil* 30: 1; *J* 48: 14); and it is now well known that in the Subconscious, love and hate coexist without affecting each other, also tenderness and cruelty, prudishness and lust, cleanliness and filth, and other such split impulse. Here too the sexes are separate.<sup>(16)</sup>

ということである。又、Beulah は永遠の世界と、Ulro の世界との中間に位置しているともいわれている。Ulro の世界とは、

Such is the nature of the Ulro that whatever enters becomes Sexual & is Created and Vegetated and Born.<sup>(17)</sup>

であるから Material world である。一方永遠の世界は

In Eternity, the Individual contains his feminine portion within him ; consequently marriage does not exist there. "Humanity is far above sexual organization & the Visions of the Night of Beulah where Sexes wander in dreams of bliss among the Emanations" (*J* 79 : 73).<sup>(18)</sup>

なのである。この絵には、

I want ! I want !

という言葉がついており、又、Key は、

On the shadows of the Moon  
Climbing thro' Night's highest noon.

とあるから、要するにこの絵は、若者が理性の支配する Material World を脱出して、月の世界、即ち Beulah の世界にあこがれていることを示しているのであろう。G. Keynes は1968年に出版した Blake の *The Gates of Paradise* の複製本の Commentary の中で

...the moon is the symbol of 'Beulah' or ideal marriage, in Blake's system.<sup>(19)</sup>

と言っているので、この若者は性的に男性と女性と区別されながらも、互に共存していくという ideal marriage を求め、あこがれているのである。ところがこの若者は左足から登ろうと梯子に足をかけているので、左足は material means をあらかず<sup>(20)</sup>から、若者のあこがれ、求める結婚は実現されないことを吾々読者は知る。いやすでに、この絵の中では、若者の行為が実現不可能なこととして、笑いながら見ている一組の男女がいる。

## (12) Plate 10



まっくらな夜の海に、おぼれて、助けてくれと叫んでいる人の絵である。

Help! Help!

という言葉がついている。Keyをみると、

In Time's Ocean falling down'd

ということである。従ってこの絵は、時間という海に落ちて、潮流に流されながら助けを求める人の絵である。Blakeの場合、時間は空間と共に Material World をあらわしている。時間にもとづいて、理知的に空間における自分の行動を判断している人は、いつも「忙しい」「忙しい」といって動きまわっている。「忙しい」という字は「心を亡ぼす」ということをあらわしていると言われているように、時間に追われて行動している人は、時間の海に落ち、おぼれている人なのである。時間に追いかけられもせず、時間に対して超然としていることが必要なのであって、そのためには、

For all are Men in Eternity, Rivers, Mountains, Cities, Villages,  
All are Human, & when you enter into their Bosoms you walk  
In Heavens & Earths, as in your own Bosom you hear your Heaven

And Earth & all you behold; tho' it appears Without, it is Within,  
In your Imagination, of which this World of Mortality is but a Shadow.<sup>(21)</sup>

という自覚が必要である。そういう自覚のある人、そういう境地を体得した人を Blake は Poetic Genesus (詩的天才) とか, True man 又は Man (真人) と呼んでいる。それ故 Blake はこの絵を書くことによって、時間に追われて毎日生活しているような生き方は、いつもおぼれて助けを求めている人のようなもので、自分の心を滅ぼしてしまうことになるから、すぐさま, Poetic Genesus とか True Man と呼ばれるような生き方を見つけなければならないと教えているのである。

### (13) Plate 11



老人が木の下にすわって、幼ない天子の翼を大きな鋏で切っている絵である。これには、

Aged Ignorance  
Perceptive Organs closed, their Objects close.

という言葉がついている。老人は Blake が好んで描がく Urizen と全く同じ容姿であるので理性でもって一切を判断し、理性による尺度で一切を分別して行こ

うとする行き方の人である。しかもその上、自分自身を神と同格に見ているから、自分の考えや思想を絶対視し、新しい考えやみずみずしい思想を受け入れることを拒否しがちである。結局、そのような人は自らの知覚の扉を閉ざし、自分の殻の中に閉じこもることになるから、正にがんこな表情をした孤独の老人として Blake は描くから、Urizen のような容姿にならざるを得ないのであろう。そういうような人を Blake は Key の中で

In Aged Ignorance profound,  
 Holy & cold, I clip'd the Wings  
 Of all Sublunary Things,

と言っているのである。又、この絵には、老人のすわっているところに繁った木がかいてあるが、老人にふさわしい Vegetable Life をあらわしているのであろう。この絵では、又、太陽が正に沈まんとしている。Material World において Vegetable Life を送る人にとっては、Imagination は必要がないわけであるから、Imagination をあらわす太陽は、姿をかくすべく沈まんとしているのである。若々しい思想や新しい考え方等をあらわす天子は、自分の思想や考えを絶対視する老人に羽を切られ、自由に飛びまわれないようにされ、沈まんとする太陽に別れの手をふっている。若い人の持つ新しい思想や考えは、いつも老人や年長者の考えや思想に押さえ込まれ、切り取られて、形骸化されていくのが、この世の姿である。

## (14) Plate 12



息子や孫と一しょに牢獄の中に入れられた Count Ugolino の絵である。Ugolino della Gherardesca (1200?—1289) はイタリアの Pisa の貴族であるが、裏切者の司祭のために政治的陰謀の罪で捕えられ、2人の子と2人の孫と共に投獄され、牢の中で餓死したのであった。この絵には、

Does thy God, O Priest, take such vengeance as this?

という言葉がある。人には誰れにでも執着心というものがあって、社会的地位とか名譽、財産等に対しては、特に執着心が強い。聖職者である司祭といえども、保身のためには神を利用し、神の名において反対者を取り除こうとするのである。Key には、

And in depths of my Dungeons  
Closed the Father & the Sons.

とある。歴史の語るところによれば、Count Ugolino は Pisa の主権を手に入れようとしたことが、司祭の裏切りにあって、果さず、捕えられて投獄されたということである。それ故 Count Ugolino 一族の不幸は、もとはといえば、彼の野心がつくり出したのであり、彼の野心が彼等を投獄し、彼等を苦しめている

といえるのである。そういうわけで Count Ugolino 一族のこの姿は、裏切りにあつたために負わされた苦悩ではなくて、自分達一族が招いた苦悩なのであって、いわば、自業自得なのである。Key で my Dangeons と言っているのはそういうことであろう。真の神は決して復讐はしない。野心という神が復讐をするのである。

### (15) Plate 13



一人の男が妻と二人の子供と共に、臨終の父（か、兄弟か、又は友人か）のそばにいる。彼らはその臨終の人がこの世に肉体だけ置いて、天を指さしながら今正に昇らんとしているのを見て、おどろいているという絵である。この絵には、

Fear & Hope are—Vision.

とあり、Key には、

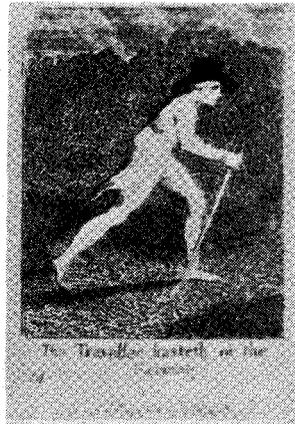
But when once I did descry  
The Immortal Man that cannot Die,

とある。Immortal Manとは、Blakeの場合は、Poetic GeniusとかTrue Manのことになるのだが、そういう人が、Material Worldの中で時間に追いまわされて生き、しかも自分自身を dangeon の中に閉じ込めて一喜一憂の生活をしている吾々に対して、Imaginationの世界を指し示してくれているのである。そうして吾々が指し示された Imaginationの世界に吾々の五官の扉が開かれると、山川草木すべて仏性ありで、山も川も木も町も村も、一切のものが皆人間 (Human Form) であり、又、

Man is All Imagination. God is Man & exists in us & we in him.<sup>(22)</sup>

という永遠の世界を覚ることが出来るのである。今この絵では、肉体を置いて天に昇ろうとする Immortal Manによって、教えられた永遠の世界である Imaginationの世界を、今、彼等の Visionによって感得することが出来ると、希望が湧いてくるやら、あまりのすばらしさに恐れてしまうやら、というようなことを表わしているのであろう。

### (16) Plate 14



この絵を見ると、一日の労働を終えた人が杖を手に帰宅をいそいでいるよう

に見えるのであるが、この絵には、

The Traveller hasteth in the Evening.

という言葉がついているので、労働を終えた人ではなくて旅人が、夕暮れ時の道をいそいでいるということがわかる。旅人はもちろん人生街道を歩く吾々一人一人のことである。画中の人は、今、自分の人生が暮れかかっているのに、早く目的地である永遠の世界に到着しようと急いでいるのである。Keyには、

Thro' evening shades I haste away  
To close the Labours of my Day.

とある。吾々は日々人生の終着地へ向け近づいているのであるが、若い中は中々そのようなことがわからない。まして自分の人生が夕暮れになっているのにもかかわらず、己れの終着地をはっきりさせないで平然としている人が多い。自分の人生の一日が終わったらどうなるのかということを急いではっきりさせねばならない。吾々は夕暮れの道を急いで歩いているのだ。

### (17) Plate 15



老人が杖をついて洞窟の中に入ろうとしている絵である。この絵には

Death's Door

という言葉がつけてあるので、各自一人一人が己れの終着駅をはっきりさせないで、ただ自分の人生を歩み続けるだけならば、たどりつくところは「死の扉」が開いている洞窟、即ち墓地でしかないということを示しているのであろう。この絵の解釈はこれだけのものでしかないのだが、Blakeはこの絵に Key をつけることによって Plate 16 とつなげようとした。Key は、

The Door of Death I open found  
And the Worm Weaving in the Ground:

とある。この絵では、老人が「死の扉」が開きかけているこの洞窟の入口で、右足を先にして入るまでは、「地面の中で機を織っている虫」に逢うなどとは、決して考えていなかったはずである。Weaving は元来女性の仕事とされてきているものであるが、Blake の神話では、女性の仕事の外に、生殖を意味する言葉である。それ故、人生の旅を終えた人がたどりつく墓地は、又肉体の衣をまとった生命を生み出す子宮でもある。そうして、今死におもむく「私」は、機を織っている虫 (Worm) の餌になることになるのだ。

## (18) Plate 16



この絵は前の15図から続くものである。即ち、人生の旅をひたすら旅した人は、当然の帰結として死に迎えられ、その結果、杖をもち、きょうかたびらを着せられて木の根の下に埋葬されるのである。この絵ではすでに埋葬されている人の頭が二つ見える。洞窟の死の扉をくぐった時、機を織っている虫(Worm)を見たのであったが、今その虫は埋葬された「私」のまわりに、大きなへビのようにまといつているのである。絵には

I have said to the Worm:  
Thou art my mother & my sister.

という言葉がついている。この言葉はおそらく「ヨブ記」のXVII:14の

I have said to corruption thou art my father, to the worm thou art my mother and my sister.

から来ていると思われる。Plate 15 で見たように、洞窟は死者を埋葬する墓であるばかりでなく、新たに生命をこの世に生み出す子宮でもある。墓地に埋葬された体は corruption され、虫の餌になり、虫はその結果、育てられ、新しい肉体をもった存在になってゆく。永遠の生に生きる人は己れの肉体がどのよ

うに corruption され、そうしてどのように虫の餌になっても、かまわないのである。むしろ虫の餌になることによって、虫が育ってゆけば、虫に対して、「My mother」とか「my sister」とかという親近感がわくというものであろう。

1793年版では、ここで終わっているのであるが、1818年のには Key として、次のような言葉がついている。

Thou'rt my Mother from the Womb,  
Wife, Sister, Daughter, to the Tomb,  
Weaving to Dreams the Sexual strife  
And weeping over the Web of Life.

S. F. Damen によると、Blake の神話では、

Vala is first a worm, then becomes a serpent and a dragon, before she is born as an infant (*FZ* 11: 83-92). Orc also is first a worm in the womb, then a serpent, then "many forms of fish, bird & beast" before he is born as a baby (*Ur*. 19: 20-36).<sup>(23)</sup>

なのである。「Vala は infant として生れる前 serpent であり dragon であった」とか、「Orc は baby として生れる前、worm であり、それから serpent であり、そして fish や bird や beast の姿をしていた」ということはどういうことかという、生物学の方でいう「個体発生は系統発生をくり返す」ということを Blake なりに言ったものであろう。だが Blake の神話によると、自然界の女神である Vala は Luvah の Emanation であり、しかも Albion の墮落の主たる因が彼女にあるとされているし、又 Orc は Luvah の a lower form であるところの repressed love、即ち物質界における Revolution をあらわすとされているので、これらが worm として子宮の中に宿ると、母であろうと妻であろうと、妹であろうと娘であろうと、世の女性は皆女性本能にめざめ sexual strife が旺盛になり、又物質欲にめざめて Web of Life をひろげて男性を誘惑するようになるというのが、Key の意味であらう。

Blake によれば、永遠の世界においては、男性も女性もないのであるから、

In Eternity they neither marry nor are given in marriage.<sup>(24)</sup>

であり、又

Sexes must vanish & cease to be when Albion arises from his dread repose.<sup>(25)</sup>

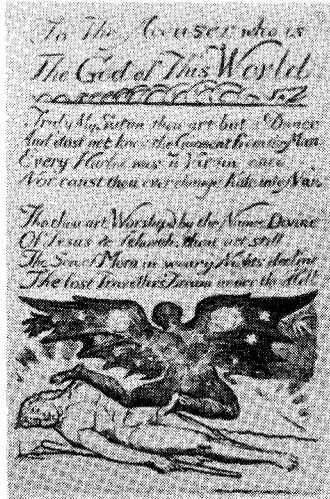
であるから、Humanityということにおいては男も女も同じである。Blakeの神話で言えば、4つのZoaであるLos, Urizen, LuvahそれにTharmasがそれぞれ分相応に方位を守る等、それぞれの役目を果しておれば、Sexual Strifeもおこらないし、Web of Lifeを張る必要もないのである。従ってSexual Strifeを夢見、又、Web of Lifeを張りめぐらしている「私の母、妻、妹、娘」は、永遠の世界からFallした状態にあるのであって、彼女等がこの世に生れる前の、墓地の中のwormの状態にある時に、もうすでにSexual Strifeを夢見、又Web of Lifeを張りめぐらしているというのであるから、女人性というか、女の魔性というか、ものすごいものである。

かくの如く、我々の肉体は生れる時から死ぬ時まで、否、この世に生れる前の子宮の中にいた時から、死んで埋葬されてwormの餌になる時まで、wormと親しい関係があるのである。死んで虫の餌になることによって、wormの一部となり、wormに生れ変ると考えれば、吾々は迷いの姿で輪廻転生をくり返しているということが出来よう。

1793年版では、吾々の人生の旅は死でもって終りとなるということで、「子供達のために」はそれでよかったろうし、思想的にみても取りたてて考える程のこともなかった。しかし1818年版には、Keyがつけられたおかげで、Plate 16がFrontispieceと続くことになり、吾々の流転・転生の姿が示されたことになる。

もちろんBlakeの本心は迷いの旅路をさまようことをやめて、一日も早く輪廻転生に終止符を打ち、肉体はwormに残して、The Gates of Paradiseに入り、永遠の生に生きることを薦めることであつたのである。

## (19) Epilogue



更に1818年版にはEpilogueがついている。このEpilogueは内容的に言ってPrologueとかかわりがあると思う。Epilogueは次のようになっている。

To The Accuser who is  
The God of This World

Truly, My Satan, thou art but a Dunce,  
And dost not know the Garment from the Man.  
Every Harlot was a Virgin once,  
Nor can'st thou ever change Kate into Nan.

Tho' thou art Worship'd by the Names Divine  
Of Jesus & Jehovah, thou art still  
The Son of Morn in weary Night's decline,  
The lost Traveller's Dream under the Hill.

このEpilogueにおけるAccuserは、PrologueのところのAccuserとはちがって、「この世の神であるところのAccuser」のことである。「この世の神」とは、も

もちろん、キリスト者達によってJesusとかJehovahとかとしてあがめられているところの神なのであるが、「この世の神であるところのAccuser」とBlakeが特に言う場合は、JesusとかJehovahとかという神の衣服 (Garment) を着たSatanに外ならないのである。Blakeは*Divine Image*の中で言っているように、神というのは

Where Mercy, Love & Pity dwell  
There God is dewelling too.

なのである。BlakeはPrologueのところでも述べていたようにJesusは決して十誠を認めなかったのに、世のキリスト者達は、JesusやJehovahが「～すべからず」と吾々に言ったかの如くに教えていると批難し、このような「～すべからず」という教にはMercyも、Loveも、Pityもないから、「真人」(Man又はTrue Man)である神は存在せず、代りに神の衣服 (Garment) を着たSatanが神の如く君臨して、例えば、売春婦をきびしく問責している有様であると言うのである。Blakeは社会問題に対して強い関心を持ち、*Songs of Innocence*や、*Songs of Experience*等をはじめとする色々な詩等で、exploitersに対するはげしい攻撃や非難をしているし、又、売春婦やChimmy-sweeperの子供達、hapless soldiers等に涙を流していることは周知の事である。従ってこのEpilogueにおいても、神の衣服を着て売春婦を非難する問責者に対して、「彼女だってかつてはMaryと同じく、mercy, love, pityの心を持っていたのだ。それなのに、～すべからずと彼女を問責してみたところで、Kateの名をNanに変えるように簡単に彼女の生活を変えさせることは出来ないのだ。それよりもMercy, Love, Pityの心でもって彼女に接した方が、どれ程彼女にとって救いになるか知れぬ程である。それなのに、お前達はただ～すべからずと言うだけで、か弱い彼女を泣かせているだけではないか」というのがBlakeの主張であろう。真のJesusもJehovahも人を罰したり、人を罰に落とし入れようとしたりはしなかったのである。

従って、真のJesus、真のJehovahが、朝の太陽のように、この世にあらわれる時、神の衣服を着て問責していたSatanは、さまよえる旅人の悪夢のように、

たちまちその存在の影を失ってしまって、天国 (Paradise) がまばゆいばかりに、眼前に開かれてくるのだとってBlakeはEpilogueを結んでいる。

## 結 び

以上の如く1818年版の *The Gates of Paradise* を中心に見てきたのであるが、1793年版では、Blakeの人生観にもとづいて、子供達のために、人間の一生というものが説かれたという感じがするのに対し、1818年版では、Keyがつけられているだけ各emblemに対する解釈が深いものになり、大人の男女を対象に説かれているという感じがする。内容的に見てみると、1793年版では、生れながらにして原罪を背負っている吾々人間は、理性にもとづく悩み苦しみの人生を送りながらも、五体が健康で満足な中に、永遠の世界 (Paradise) に心の眼が開かれなければ、吾々は死の待っている墓場にどんどん進んでいくだけであると言っているのに対し、1818年ではKeyをよりどころにして読むと、永遠の世界 (Paradise) に対する心の眼が開かれなければ、吾々は原罪を背負ったまま、輪廻転生の迷いの生をくり返すだけであることを言い、更にPrologueとEpilogueをつけ加えて読むと、永遠の世界 (Paradise) に対する心の眼をどうやったら開くことが出来るかと言えば、それは吾々人間は生れながらにして原罪を背負っているため、地獄 (Hell) の苦しみの人生を生きているのであるが、Mercy, Love, Pityの心を持って、お互許し合いながら生きて行くことが出来るならば、永遠の世界をみる心の眼が自然に、開かれてくる、否、地獄の中にいると思いながら、その実天国の光の中に生きている自分がわかるようになる」とBlakeは言うのである。

ParadiseとHellは相対立して存在するものではなく、相即相入の関係においてあるものだというところにBlakeは気がついたから、*The Gates of Hell* の彫版はしなかったのであるが、その代りに、1818年の版では、1793年のと同じEmblem bookを使用しながら、*The Keys* や *Prologue* それに *Epilogue* をつけ加えて、ParadiseとHellとが相即相入の関係にあることをBlakeは明らかにしたというこ

と言えるのであろう。それ故*The Gates of Paradise*に対するものとして*The Gates of Hell*を作ろうとしたとて、作れないのは当然なのである。

(昭和56年5月18日受理)

(註)

- (1) S. Foster Damon : *William Blake, his Philosophy and Symbols*, Peter Smith, 1958, p. 83
- (2) Geoffrey Keynes : *William Blake's The Gates of Paradise, Introductory volume*, 1968, p. 9
- (3) Geoffrey Keynes : *The Complete Writings of William Blake*, the Nonesuch Press, London, 1957, p. 152
- (4) *Ibid.*, pp. 433-434
- (5) *Ibid.*, p. 617
- (6) *Ibid.*, p. 154
- (7) *Ibid.*, p. 662
- (8) *Ibid.*, p. 734
- (9) *Ibid.*, p. 158
- (10) *Ibid.*, p. 613
- (11) S. F. Damon : *A Blake Dictionary*, Brown Univ. Press, 1965, p. 432.
- (12) *Ibid.*, p.
- (13) S. F. Damon : *William Blake, his Philosophy and Symbols*, p. 85.
- (14) Geoffrey Keynes : *The Complete Writings of William Blake*, p. 533
- (15) *Ibid.*, p. 714.
- (16) S. F. Damon : *A Blake Dictionary*, pp. 42-43.
- (17) Geoffrey Keynes : *The Complete Writings of William Blake*, p. 674
- (18) S. F. Damon : *A Blake Dictionary*, p. 43
- (19) Geoffrey Keynes : *William Blake's The Gates of Paradise*, Introductory volume, p. 16
- (20) *Ibid.*, p. 16
- (21) Geoffrey Keynes : *The Complete Writings of William Blake*, p. 709
- (22) *Ibid.*, p. 775
- (23) S. F. Damon : *A Blake Dictionary*, p. 452
- (24) Geoffrey Keynes : *The Complete Writings of William Blake*, p. 660
- (25) *Ibid.*, p. 739